

新田川遺跡発掘調査

新田川遺跡は現在の吉津川右岸に位置します。標高は5.5m前後で現在の水田面より70cm下にあたり、今から1300年程前の奈良・平安時代の遺跡です。遺構としては、調査区の北東部分から3本の溝でコの字状に囲まれた範囲が見つかり、その中に柱穴^{はしらあな}と思われる穴が発見されました。建物跡と思われます。またその近くには井戸や畑、柵なども見つかりました。遺物としては、その当時の焼き物である須恵器や土師器、そして漆塗り製品^{うるしめり}などが発掘されました。

建物

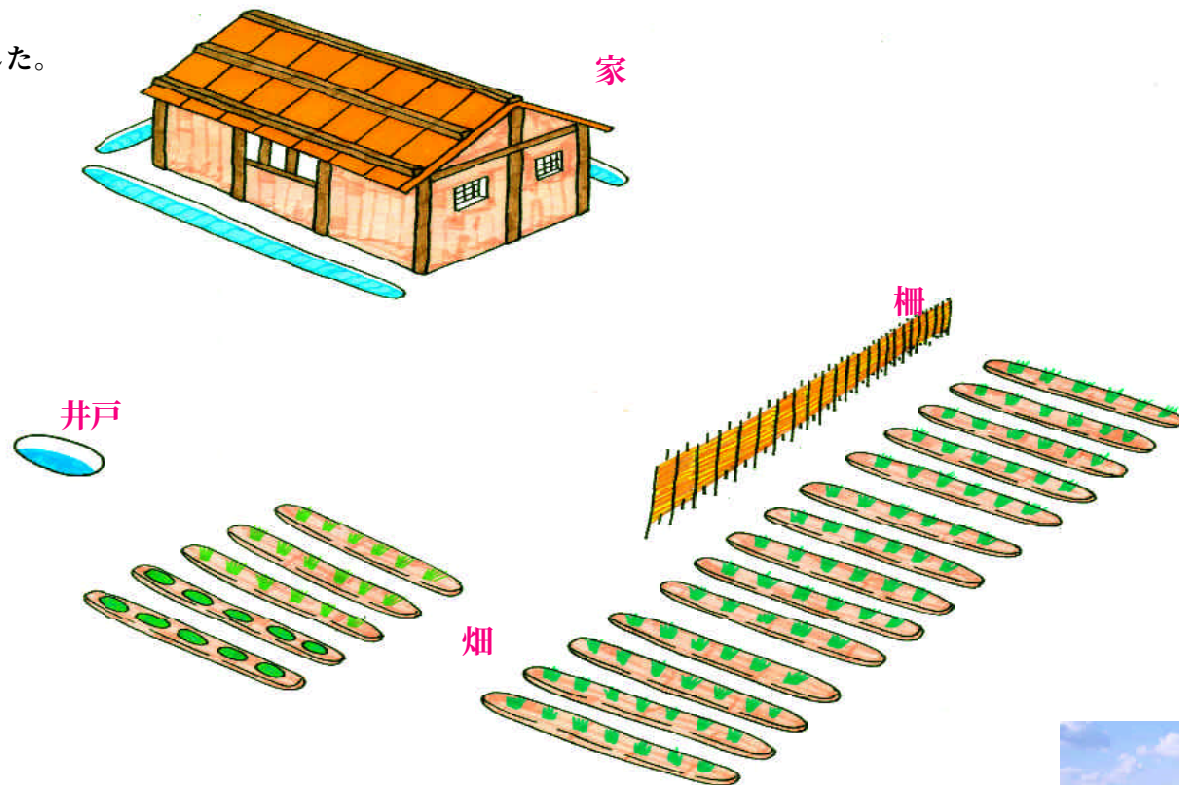
この当時の建物は、今のような基礎を使わずに地面に穴をあけ、その穴の中に柱を入れて建物を建てたものがあり、「掘立柱建物」と呼んでいます。

新田川遺跡では、建物が長さ約5m程の3本の雨落ち溝^{あまおみぞ}と思われる溝にコの字状に囲まれた範囲に見つかり、建物の規模は2×3間の側柱で、1棟あります。

雨落ち溝の中から遺物がまとまって出土しました。



建物跡（SB1）



焼き物の出土した様子



雨落ち溝から出土した焼き物



柱根

井戸

直径約2m、深さ約1mのものが1基発見されています。

その中から遺物がいくつか出土しています。また一緒にウメの種が見つかり、埋め戻しの習慣の一例かもしれません。



井戸

土坑

長軸約1.8m・短軸約1.2m、深さ約30cm（SK447）のものや、直径2m、深さ約32cm（SK448）などがあり、すり鉢状に掘られています。出土遺物は有台^{ゆうだい}や漆塗り製品^{うるしめり}などがあります。



漆塗り製品



出土した食器



柵列

柵列状遺構

1つの穴の直径が6～9cmで深さは深いもので15cmあり、それぞれ交互に12m続きます。

この柵列から西側には畝状遺構がないことから、畑との境界ではないかと考えられます。



畝状遺構（畑跡）

畝状遺構

建物跡の主軸方位は今現在建物自体が1棟しかなく、一方向しかわかりませんがそれと同一方向の溝が18条、またそれとは異なった方向の溝は29条見つかり、そこからの遺跡にも時期差があったことが伺えます。

溝は、見つかった部分だけで幅20～30cm・深さ10～15cm・長さは最長で9mを数えます。これらはだいたい0.5～1m間隔でほぼ同一方向に掘られていることから、畑の畝を作った時に掘られた溝と考えられます。



弥彦山を望む

